

余り後戻り。

いよいよ帰国のため復員船栄豊丸に乗船できたときにはうれしくて涙があふれた。十一月二十七日ナホトカ出航。

復員船栄豊丸がナホトカ港出航と同時に、赤旗組（共產主義者）と日の丸組（反共者）の対立抗争で船内は大混乱。船長の指示で日の丸組は分離。日の丸組と赤旗組は船室を区分され、舞鶴では別々に下船復員した。

私が舞鶴に上陸したのは十二月四日で、復員十二月十一日である。

村長さんはじめ親類地区住民の方々のお出迎えを受け故郷の筑波大石駅に降りたのは、昭和二十四年十二月十二日。思えば赤紙召集で故郷のこの駅を出発して以来五年九カ月目のことであった。

忘れえぬ日々

岩手県 梅津 盛一

ソ連軍の指揮下に入ったのは、昭和二十年九月上旬だった。それまで奉天地方の虎石台という部落で分宿していた我々は、奉天市内の北陵に集合させられた。約千人ぐらいの単位で他にもたくさん集まっていた。ここでは毎朝の点呼のほかは、附近の跡片づけ作業をする程度であり、約一か月ぐらいはこのような状態が続いた。なにしろ戦争が終わったのであるから、いつ帰してくれるのか、毎日そんな話題でもちきりであった。十月に入ったところ移動の命令が伝えられた。いよいよ内地へ帰れるという情報や、いや、強制労働させられるそうだといううわさもあり、期待と不安にかられながら皇姑屯駅から客車に乗せられた。何分にも戦後の混乱期だったので、輸送も円滑ではなく、停車をしている時間の方が長かった。ところが、気がついてみると、北へ北へと向かって

いるではないか。新京を過ぎ、ハルピンを過ぎ、北安を過ぎ、とうとう最北端の黒河へ来てしまったのである。

ソ満国境の黒竜江が滔々として流れている河岸に三日ほど野営し、毎日何回となく船で対岸のソ連領ブラゴエチエンスクに渡って行く同僚を見送りながら、順番を待った。北満の朝はもう寒い十月であった。

順番がきて、たくさんの人の糧秣とともに乗船し、対岸のブラゴエチエンスクに上陸した。

郊外で一晩野営し、翌日ここで所持品の検査があり、国旗や、今まで許されていた将校の軍刀が全部棄却させられた。先祖伝来の名刀も数多くあっただろうが、敗戦とはこのようなものかと思つた。さて今度は中央出入り口を除き、上下二段に分かれた六十屯有蓋貨車に乗せられ、出入り口は外から施錠された。一貨車三十〜四十人ぐらいつでであった。このときはまだシベリア鉄道経由でウラジオストックから帰れるという情報が多かつた。しかし、その期待もはずれ、走る貨車は毎日西へ西へと向かつていた。このころになると、もう帰れるということは断念せざるを得なかつた。

途中主な駅での給食はたまにあつたが、空腹のしどろしどろであつた。ずいぶん長い間貨車に缶詰め状態で輸送されたが、十一月上旬の朝日的地に到着して、一日がかりで全員入浴させられた。そしてとうとう次の日の朝まで給食がなかつた。人づてに聞いてみると、中央アジアのタシケントであつた。このタシケントには昭和二十二年七月ころまでいたが、収容所は市街地の東はずれにあり、約千人が収容されていた。ここでの作業は主に、七〇八工場での機械作業や、土木、あるいは市内の建築工事現場の手伝い等で、初めのころは、中隊単位（百人ぐらい）の作業だったが、だんだん職場の数が多くなつたため、小人数に分散して作業する現場もあつた。いずれの場合も監視兵つきであり、終始苦しめられたノルマにしても鉄工場の機械作業以外には、いくらやっても満足してもらえなかつた。それでも幸いなことに、ここは氣候的に恵まれており、空腹を抱えての抑留者には大いに助かつた。ここの収容所にいたとき、私は痔を悪くして帰るまで大変な思いをした。なにしろマラリヤ熱と違つて休ませてくれないのである。

それからある現場で、鉄材を移動する作業をしていたとき、左足の親指を挟み、生爪を剥がしたことがあったが、今でも色の変わった爪が出ている。昭和二十二年七月ころ五十人ぐらいの同僚とともに転属を命ぜられた。

また貨車で移動したが、あまり遠い所ではなかった。着いたのはベグワードという所で、草も木もない砂漠のような所だった。ここでの作業は、近くにダムがあり、ここからの発電所への大導水路の工事が中心であり、土工作業、法面の石張り作業、石山の切り出し作業と、毎日千人が各職場に分かれて、季節によっては三交代の作業であった。やはりここでもノルマに苦しめられた。冬から翌春にかけて西からの季節風が強く、砂ぼこりで目が開けられないような日が何日もあった。

昭和二十三年五月のメーデーが終わったころ、病弱者約百人ぐらいにダモイの連絡があり、私も含まれていた。夢にまで見たときがとうとう来た。そしてまた貨車に揺られること二十三日間で、ナホトカに着いた。途中バイカル湖が見える所をかなりの時間をかけて通過した。しかし、今度は東へ東へと向かっていたので、安心

して乗っておれた。

ところが、ナホトカで一週間ほど過ぎたころ、我々の一団は反動的だということで、ウラジオストックへ逆送された。三百人ぐらいたったと思うが、今度は客車であり、上段、中段、下段に組み立てられる寝台車であった。ウラジオストックは、坂のある路面電車が走っている街だった。

ここでは主に、石炭を船に積み作業や雑役であった。しかし、今までと違ってノルマに追い立てられることはなかった。収容所は港を見おろす丘の上であり、眺めはよかった。一か月近くでまたナホトカへ帰って来た。今度はナホトカの第四収容所を経由して、港まで約二キロぐらいの間、五列縦隊で元氣を出して革命歌を歌いながら船着場に到着した。

ナホトカは当時、別段接岸施設がなく、陸に近づいた引揚船に、滑り止めのついた板を渡し、それを昇って乗船した。ソ連の係官が一人ひとり名前を読み上げる方法であり、私のときにウメツセイイチと呼ばれ、確認を受けて乗船した。これでやっと帰れると思った。昭和二十

三年七月下旬であり、これらのことは、生涯忘れることができない。

騙されて四年

新潟県 青柳 善吉

終戦は北朝鮮清津高射機関隊で迎えた。羅南師団管区師令の命令で、北鮮朱乙で武装解除、右茂山収容所へ。収容所は裏の丘に穴を掘り、石を積み上げた、十五人しか入れない、粗末この上なしの施設。中に石で炉をつくった。

ダワイで薪とり作業、食糧は十五人で米三合、大豆一升、塩スプーンに一杯である。初めのうちは大豆を煎って食べ、水を飲んで腹をふくらませていたが、全員が下痢をするような始末。相談して一斗缶に大豆、米を入れ、水を入れて雑炊をつくって、各人飯盒のふたに分けてあつて食べることにしたが、なんとしても腹がすく。

日に日に身体の力がなくなっていくばかり、蛙、蛇、

食べられると思われるものは、青ざや、がえるっ葉、片っぱしから腹を満たすために食べる日が続いた。一人当たり毛布一枚の寝具、シラミがたかり、水で洗っては石の上で乾かしては使っていたが、発疹チブスが発生し、一人また一人と死んでいった。

屍は埋葬することになったが、穴を掘る力もないので、畠のウネの間に置いてくるのがやっとである。烏が何百羽となくきては屍体を食い荒らす。風に乗って屍臭が鼻をつく。風呂に入れるようになったのは三か月後の十月末である。

十一月、右茂山駅から平城港、そこから船に乗せられ、通訳当番となってポセツト港に着いた。通訳が聞いたところでは、三年くらいは覚悟しなければならぬとのことだった。「ダモイ、トウキョウ」の言葉を無条件に信じたために大変なことになった。「しまった」と叫んでも後の祭り。当時二十六歳だから、二十九歳まではどういうことになっていくのか、死んでたまるか!という気持ちで通訳に、寒いところはいいやだ、暖かいところへやってくれと頼みこむと、明日五百人くらいの作業隊を